

オアシス新聞

第四十号

見つけてほっこり、野に咲くすみれ

ツクシ、タンポポと並び、春の訪れを知らせてくれるスミシの花。上品で可憐な紫色の花を見つけると、暖かい春が訪れたことに気づかされ、寒さで力が入っていた肩の力が一気に緩まります。

スミシにもいろいろな種類がありますが、最も一般的な種は『タチツボスミシ』といい、野山や明るい林床などでよく見かけます。道端で見かけることもあります。やはり自然が多く残る地域でないと、なかなか見つめることは難しいかもしれません。春を代表する花とは言っても、都心に住む人にとっては、スミシは身近な植物というより、花屋さんで売っている山野草という認識になってきているかもしれません。

スミシの花と言えば紫色というイメージですが、中には白やピンク、黄色といったものもあります。それでもやっぱり『すみれ色』と言えば紫色になります。紫と言っても色幅がかなりありますが、紫を英語で言うところパールで、赤みのある紫色になります。そしてすみれ色を英語で言うところハイオレットで、青みのある紫色になります。

すみれ色はどちらかというと落ち着きのある薄墨色を帯びた紫といった感じですが、スミシと墨にはつながりがあります。スミシの花を横から見ると、花の後ろの部分に距(きょ)と呼ばれる蜜を溜めるぶつくりとしたふくらみがあるのですが、そのふくらみが大工さんの使う墨壺(墨入れ)に形が似ていることから、『すみれ』→『すみれ』と変化したとされています。こういった名前はいわゆる諸説あり、信じるか信じないかはあなた次第といったところでしょうが、すみれ色を見て墨が溶け込んでいるような色合いに見えるとしたら、墨壺からにじんできたのかな?と思うのも粋なものです。春の空も他の季節と比べると、晴れていても薄雲がかかったようなやわらかな色合いに感じられます。くっきりとはせず、ちょっと朧がかかった色合いは、春特有のものなのかもしれませんね。

